

### 1) 演奏リハーサル

演奏者は、2023年初頭より修練に入った。2023年度に入ってから立ち合いリハーサルは、グリーンフェスティバル出演(5月20日)前の5月14日と、録音(9月11日、12日)前の8月31日に行った。25分という長丁場の音楽であることと、多くの部分が音楽様式として無定形主義(Amorphism)で次々現れる新しい音楽を弾き続けることは、作品の大きな特徴であると共に、演奏家にとって大きな負担である。但し、唯一回の実演のための練習と録音のための練習とでは、取り組み方に若干の相違がある。実演は、1回通して演奏され聴かれるのみだが、録音は細かく区切った演奏が可能である上、繰り返し聴かれ得るものである。そのため、前者の場合は、全体の勢いや流れ、その場での奏者の負担も考慮する必要があるが、後者では部分的に演奏していくため奏者の負担を実演ほど考慮する必要はなく、取り直すことでミス無くすることに傾注することになる。そのために、後者のリハーサルでは作品の細部の表現の彫琢により労力を費やすことになる。

### 2) 録音・編集作業

演奏時間25分ほどの作品で、上記9月11日、12日2日間に渡り、各日約5時間の録音セッションを行った。具体的な作業は、1分から5分ほどの部分を収録しつつ、適宜録音を再生して確認し、ミスや音楽的に不十分な部分を改めて録音しながら、ひとつの最良の演奏録音を作り上げていくものである。現代の録音技術は、部分的に修正していくのが常であり、更に、全体の音響状態もミキシングによって操作することができる。録音後、録音担当者から幾つかの素材を提示され、最終的にCD化する素材は、私の方で判断した。こういった一連の活動を、これまでに全4曲分4回行い、一枚のCDとして完成させる予定である。前回の報告でも触れたが、演奏に当たって、この度、リズムが自由でプロポーションな記譜法から通常の記譜法に全面的に変更した。演奏に当たってより正確な指示を目指しての変更であったが、ある部分では、演奏家がこの正確に記された拍に捉われることが、表現の不自由さと拍を守らなければならない負担が生じる、という指摘が演奏者よりあり、その部分に関しては自由に弾いてよいということとした。楽譜によって音楽の形を示しつつ、十分に理解された暁には楽譜に捉われず自由に演奏されてよいということであり、これはどのような音楽でもその極められた姿はそのようであると考えている。

### 3) 作品の世界と音楽観

音楽芸術作品の示す世界を言葉で説明することは不可能なことではあるのだが、ここに2点だけ述べておきたい。一つは不協和音の持つ表現について、もう一つは題名の意味についてである。この作品、ピアノ・ソナタ第1番「史書の扉から」は、多様な音楽表現を試みているものの、全編の殆どが不協和音による表現となっている。不協和音というものは、伝統的な西洋音楽にて探究されバロックから古典派音楽の時代に確立した協和音が、19世紀以降の音楽表現の変化に連動して変化させられたものである。音楽表現の変化というのは、ロマン主義から表現主義、そして前衛音楽に至る流れを指し、その変化の動因には実存的な人心の不安や恐れがある。この音楽の表現もこういった傾向に属するものと考えている。題名の「史書の扉から」だが、ここで史書とは巨視的な史書である0・シュペングラーの『西洋の没落』などを意味している。20世紀の初頭に顕著となった芸術表現の変化は、政治から思想に至る世界の変化と連動したものであり、私の作曲はそれらの思想から大きな影響を受けているため、本作にはこの題名を付している。